

# 卒業後の豊かな生活につながる高等部の教育実践を考える

高等部学部研究

## 1 はじめに

高等部では、障害・発達・教育歴の異なる約70名の生徒たちが学んでいます。近年の生徒像の変化と特徴として、以下のことがあげられます。

- ①発達障害といわれる生徒や、精神疾患、不登校などの課題を抱えた生徒が増加している（地域の中学校の支援学級からの入学が増えている）
- ②自閉症スペクトラムの生徒の障害程度が重くなってきている（行動障害が顕在化しているケースが増えている）
- ③家庭生活において困難を抱えている生徒が増加している。
- ④肢体不自由の生徒が著しく減少した。

これらのことをふまえて、これまで高等部の教育で大切にしてきた基本的な視点にたつて、3年間のキャリア教育研究をすすめてきました。

基本的な視点とは、それぞれの願いや要求を大切に、彼らのライフサイクルを通して社会の主人公としての豊かな人生を歩むための土台となる力をつけることです。目先のことを考えて適応のみを優先する教育に陥らないことが大切だと考えてきました。そのために、思春期を経て「社会」とつながっていく青年期の教育を、キャリア教育の視点からとらえ直し、生徒一人ひとりが将来、社会の主権者として、生活していける力をつけることを目標において、日々の実践を積み重ねてきました。

## 2 研究の経過

### (1) 研究の大まかな見通し

3年間のキャリア教育研究を進めるにあたって、以下のような大まかな見通しをもちました。

- ①「キャリア教育」とは何か、今までの向日が丘の教育とどう違うのかを学ぶ。
- ②卒業生の姿や、進路先の方々から、卒業後の生活に必要な力とは何かを学ぶ。
- ③上記の学びをまとめて高等部の教育を振り返り、生徒一人ひとりが、社会の主人公としての豊かな人生を歩むために、高等部時代に「育てたい力」とは何かを明確にする。

### (2) 研究の方法

- ①全校研究会（全校）
- ②学部研究会（各学部毎）
- ③グループ研究会（各学部内の各グループ毎）
- ④縦割り研究会（障害・発達別のグループ編成）
- ⑤外部講師を招聘しての研修会（①～④の単位で）

本校の研究会の持ち方としては、上記のようなスタイルがあります。研究テーマと関わって、それぞれが連動しながら、すすめてきました。グループ研究会で検討したものを、学部研究会で論議し、全校研究会で発表するなどです。また、毎年外部講師を招聘して、青年期のキャリア教育や、障害のある人たちが働く進路先やそれを取りまく社会の状況などについて学びました。

### (3) 研究の具体的な経過

3年間のキャリア教育研究の中で行ってきた、高等部の研究活動を、5つの柱に分けて具体的な経過を以下の表で振り返ります。

柱	具体的な研究内容
と交流及びまとめ クラスの教育課程作成	①クラス毎に、個別の教育支援計画④を作成し、クラスの教育課程を作成する。→学部全員で交流する。 <毎年1学期> ②クラス・グループ毎に、今年度の教育を「教育課程のまとめ」に沿って振り返り、学部全員で確認する。 <毎年3学期>
キャリア教育に関わって	①「青年期の教育」についての研修会 小畑耕作先生 <H24年度> ②「中高生のキャリア発達」についての研修会 （中・高合同学部研）湯浅恭正先生 <H25年度> ③「つきたい力11項目」の検討、交流 <H26年度> *「キャリア教育」に関わっては、全校研でも以下の内容で実施している。 ③「キャリア教育について」 <H24年度> ④渡辺三枝子先生講演 <H26年>

柱	具体的な研究内容
卒業生の姿から学ぶ・進路先の方から学ぶ	<p>①「卒業生の姿から学ぶ」学習会&lt;H24年度&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業生アンケートの取組から</li> <li>・卒業生の様子（ビデオ）と進路先の方にインタビュー（一般企業、就労継続事業所）</li> </ul> <p>②「卒業生の姿から学ぶ」学習会&lt;H25年度&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業生の様子（ビデオ）と進路先の方にインタビュー（生活介護事業所）</li> </ul> <p>③「企業とタイアップした福祉就労に関わる進路研修会」松浦一樹氏 &lt;H26年度&gt;</p> <hr/> <p>*「卒業生の姿から学ぶ」に関わっては、全校研でも以下の内容で実施している。</p> <p>④「卒業生の姿から学ぶ」&lt;H24年度&gt; （生活介護事業所「あらぐさ」）</p> <p>⑤「卒業生の姿から学ぶ」&lt;H25年度&gt; （一般企業「松栄堂」）</p> <p>⑥「卒業生の姿から学ぶ」&lt;H25年度&gt; （就労継続B型・生活介護事業所「ひまわり園」）</p>
授業研究	<p>①中度知的クラス「体育」&lt;H24年度&gt;</p> <p>②重度重複クラス「課題学習」&lt;H25年度&gt;</p> <p>③中度知的グループの実践報告「自治の取組」&lt;H25年度&gt;</p> <p>④中度知的クラス「情報」&lt;H26年度&gt;</p> <p>⑤自閉クラス「個別学習」&lt;H26年度&gt;</p> <p>⑥軽度知的クラス「情報」&lt;H26年度&gt;</p> <p>⑦重度・重複クラスの実践報告「課題学習」&lt;H26年度&gt;</p>
高等部の課題に関	<p>①「発達障害の二次障害」についての学習会（&lt;H26年度&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ビデオ視聴と分散会</li> </ul> <p>②自閉クラスの事例研&lt;H26年度&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・重度自閉症生徒の高等部3年間の育ち</li> </ul>

### 3 高等部の研究テーマ設定の背景

全校研究テーマは、1年目（平成24年度）の終わりに、全校での研究を経て「**自分らしく 人とともに 今を生きる力を～それぞれのステージ毎に育てたい力を授業を通して考える～**」に決まりました。

それを受けて、高等部のテーマを考えるにあたって、1年目に実施した「青年期の教育」についての研修会や「卒業生の姿から学ぶ」学習会、「生活介護事業所の方に学ぶ」研修会、縦割り研究会で聞いた卒業生の保護者の

お話などを参考にしました。

①「青年期」とは、人間の成長発達の中でどういう位置にあるのか、②卒業後の社会生活を豊かに過ごすために必要なことは何か、③高等部の実践で大切な視点は何か、などの視点と高等部の現状をふまえて検討しました。

①「青年期」とは、子どもから大人へ、学校（学びの場）から社会（生活の場）への移行期である。自分自身で行動しようとする傾向が強まり、内面の葛藤に悩み苦しみ、自分を深く見つめようとする特徴がある。

②卒業後の社会生活を豊かに過ごすために必要なこととして、「働く力」は、作業学習だけで育つものではなく、学校教育全体で考えるべきであるということ。キャリア形成のためには、基礎学力の育成、生活の過ごし方、意欲、他者とのつながり等が大切であること。愚痴が言える仲間の存在の必要性などがある。

③実践を創る時の大切な視点として、

- i) 自分づくりの視点（選択、自分を見つめる、自己決定）
- ii) 自己解放の視点（一人ひとりの思いを受け止める、違ってよい、まんざらでもない自分）
- iii) 集団の大切さの視点（みんなで作り上げる、みんなで喜び合う、役割がある）

などのことを学びました。生活介護事業所の方は、「学校でつけておいてほしい力は、基本的な生活習慣の力と人への信頼である。」と端的に述べられました。

高等部は、医療的ケアの必要な重度重複障害の生徒から、地域の中学校から入学してきた知的には軽度であるが、対人関係に困難さを抱えている生徒までと発達の幅が広く、障害も、知的障害、肢体不自由、自閉症スペクトラム、発達障害、ADHDなどと多様です。しかし、障害や発達の状況は違っても、学校教育の出口の学部で学んでいることはみんな同じです。高等部3年間で、それぞれにふさわしい進路を選択して、社会に出ていくという大きな課題があります。そして卒業後も、周囲の人たちの支援を受けながら、自分らしく豊かな人生を歩んでほしい。本校で学んだ年数は違っても、これまでの学校生活でつけてきた力の上に、高等部3年間の教育があります。（12年間のつながり）

このような背景から、高等部の研究テーマ

**「卒業後の豊かな生活につながる高等部の教育実践を考える」**を設定しました。

## 4 研究を通して学んだこと

(1)「キャリア教育」とは何か。これまでの向日が丘の教育とどう違うのか。

平成26年度の全校研究会で、渡辺三枝子先生に、キャリア教育の現状とそもそものキャリア教育の捉え方、本来のキャリア教育のあり方などを、本校の全校研究テーマとからめてわかりやすくまとめてお話していただきました。そのご講演の中で、キャリア教育の本質が様々な言葉で述べられました。

- ◆キャリア教育とは、「進路指導や職業教育の新しい言葉」でも「キャリアについて教える教育」でもありません。
- ◆キャリア教育は「子どもたち一人ひとり、いざれどのような形であっても自立する」ということを重視します。自立とは人の世話を受けないということではありません。お互いに共存し合うということです。
- ◆ともすると学校は「できる・できない」と評価される場になってしまうことがあります。本当は学校は知識だけでなく社会性を学ぶ場なのです。
- ◆社会性や情緒性を育てるという点では、授業・教育実践で何が育ったのかを体系的に明らかにする必要があります。
- ◆「人とともに生きる」ということは自分にも他人にも役に立つということです。キャリア教育と称して将来の自分の計画を立てるとか、自分に適した仕事を探すということではなくて、社会の人々とともに活動することで自分の存在価値を知っていくということが大切で、機会をつくるのは学校で、子どもたち自身が自分の存在価値がわかるように指導していくことが大切です。
- ◆「ふりかえる」という人間独自の行動が、教育にはとても大切なことだと思います。過去の学びの意味と今の授業がつながっているかが大事です。子どもたちの知的経験や社会的経験をつなげる努力が必要です。

そして講演の最後に、このように結ばれました。

「キャリア教育は教育改革です。何を变えるのかという『子どもへの教え方』と『教職員が組織として力を発揮するということ』です。なるべく多様な集団で先生同士が話し合う、意見交換することを大切にしてほしいと思います。キャリア教育で強調していることは、学校が持っている力を今よりも発揮させましょうということです。」

向日が丘支援学校は、毎年、まず目の前の児童生徒たちの姿を障害、発達、生活の様々な角度からの確

に把握(アセスメント)し、それをもとに、クラスの教育課程を担当間の集団論議を経て作成しています。様々な研究会で児童生徒の実態や授業研究、事例研究などを行い、学び合っています。その意味では、“なるべく多様な集団で先生同士が話し合うこと”を大切にしていると言えるでしょう。本校で、これまで大切にしてきたことは、渡辺先生が述べられたキャリア教育の本質から、はずれてはいないと思われま。だからといって、これまで通りでよいということではありません。

サブテーマ～それぞれのステージ毎に育てたい力を授業を通して考える～との関わりで考えてみます。

研究活動のひとつに授業研があります。高等部でもここ数年は、初任者数が増え、初任者指導の担当者とも連携して、初任者の研究授業とタイアップする形で授業研をおこなってきました。その中で、丁寧なアセスメントによって生徒理解を深め、授業改善につなげていくこと、生徒の課題に迫る教材準備や環境整備をおこなうこと、「教科」や「課題学習」などのそれぞれの授業を通して、どういう力をつけさせたいかの“ねらい”を明確にすることなどが大切な視点として話されました。初任者だけでなく、教師の誰もが“いい授業”をしたいと思います。“いい授業”をするためには、高等部らしい、本物で豊かな文化を取り入れた教育内容を用意すること、深くて的確な生徒理解と、十分な教材研究と教材準備、そして教師集団のチームワークが求められます。

「目の前の子ども達から出発する」「集団論議を丁寧におこなう」という本校の教育の根幹は継承しつつ、生徒像が変わり、教職員も大幅な世代交代が進む中、より質の高い授業作りや、ふさわしい教育課程作りを目指して、常に教育改革の意識を持って、日々の実践に臨むことが向日が丘のキャリア教育になっていくのだと思います。

(2)卒業生の姿や進路先の方から学んだこと～卒業後の豊かな生活のために必要な力とは～

この3年間で、進路指導部と連携して進路先の方を招いての研修会や、卒業生の姿から学ぶ学習会を継続して行ってきました。

本校の生徒たちの卒業後の進路先としては、障害、発達の状況に応じて、①生活介護事業所、②就労継続A型、B型事業所、③就労移行支援事業所、④自立訓練事業所、⑤一般就労 などがあります。

医療的ケアの必要な重度重複障害、自閉症スペクトラム障害、軽度知的障害など様々な障害者の方から卒

業後の生活の様子を学びました。そして、彼らとともに生活している保護者や進路先の方から、学校時代につけておいてほしい力について聞くことができました。（詳細は後掲の進路指導部の「卒業生の姿から学ぶ」参照）

簡単にまとめたものが下表です。

<b>&lt;生活介護施設から求められていること&gt;</b>
・基本的な生活リズムの確立— 食べる、排泄する、寝る
・ヘルプが出せる力と人間関係— いつでも、どこでも、誰とでも
・一人で過ごせるもの、好きな事がある— 支援体制と関わって
・愛されて育ったと感じられる関わりを
・福祉サービスの利用と豊かな生活— ネットワークを広げよう
<b>&lt;就労継続の施設から求められていること&gt;</b>
・基本的な生活習慣の確立
・体力—午前9時から午後4時までの仕事
・その場に応じた挨拶や返事— 声の大きさ、相手との距離感
・指示の理解と作業能力— 「できました」「次の仕事は何ですか」
・豊かな人間関係
・余暇の利用
<b>&lt;企業から求められていること&gt;—社会に出る土台をしっかりと</b>
・挨拶、返事ができる
・社会人としての言葉遣い
・体力—午前8時から午後5時までの仕事
・友達とたっぷり取り組む関係を— 学校行事を大切に、みんなと力を合わせて取り組む体験
・「報、連、相」の徹底—自分流のやり方をしない
・趣味など余暇の充実した利用— オンとオフを切り替える

もうひとつ、進路指導部の取組で、卒業生自身にアンケート調査を行い、今の生活の様子と学校時代を振り返っての思いを聞き取って集約し、考察を加えたものがあります。（これも、詳細は後掲の進路指導部の「卒業生の姿から学ぶ」参照）その考察の中から高等部の教育で大切にすべきことを抜粋して右の表にまとめました。

<b>&lt;卒業生アンケートの考察より&gt;</b>
・体育祭、修学旅行などの行事や寄宿舎生活を通して仲間と関わる体験を保障する。その中で、人間関係やコミュニケーションの取り方など、社会に出たときに役立つ力を仲間集団の中でつけていくこと。
・教科学習として、生活に困らない基礎・基本の学習の積み重ねも大事にしていくこと。
・住んでいる地域での、自分に関わる支援についても題材に挙げて教えていくことで、困った時にどうすればよいかわかるようになってほしい。
・自分の好きなことを見つけ、将来の余暇活動が豊になること。
・卒業後も仲間集団がつながっていけるよう、学年集団づくりの観点も忘れないようにする。
・「注意された」「叱られた」ことを「自分のために教えてもらった」と肯定的に受け止められるような力を育てる。

健康で通い続けるためには、基本的な生活習慣や生活リズムの確立が誰にとっても一番大切です。

卒業後も何らかの支援を受けながら生活していく生徒たちです。周囲の人々と良好な人間関係を築く力や、コミュニケーションの力は不可欠です。

そして、余暇を充実して過ごせることの大切さはどの進路先の方からも挙げられました。働くだけではなく、生活の中で楽しみがあることは、“豊かな生活”につながりますし、長く働き続けることにもつながることだと思います。

アンケートは、主に軽度知的障害の方を対象に行ったものです。やはり、人間関係を良好に築く力や、コミュニケーションの力はとても大切です。仲間集団の中でもまれながら、みんなで作り上げる喜びを味わったり、リーダーとしてあてにされる誇らしさを感じたりすることが、良好な人間関係を築く力やコミュニケーションの力をつけることにつながるのではないのでしょうか。そして、自分らしく豊かに生活していくためには、基礎学力や困った時の問題解決能力も必要です。

(3) 高等部の時期に大切にしたいこと・育てたい力  
高等部には、約20年ほど前に軽度知的障害グループで作られた「つきたい力11項目」があります。高等部3年間でつきたい力を11項目に分け、内容を設定しました。軽度知的障害グループの教育課程や、日々の指導の土台となる視点が盛り込まれてい

ます。

一部の文言の整理と区分の変更をする時期を経て、平成23年度、進路指導部の取組で、大幅な変更が行われました。特総研から出された「キャリアプランニング・マトリックス」の4能力領域を当てはめながら、11項目を見直し、他のグループについても、それぞれの教育課程から各項目にあてはまる部分を抜き出して表に書き込みました。しかし、各グループで検討した結果、重度重複障害や自閉症スペクトラム障害のグループは、この区分に当てはめるのは難しいという意見が出されました。

そこで、平成27年度になって、項目を整理し直しました。各グループの教育課程の「教育目標」を吟味して、六つの大きい項目を設定しました。それは、「からだ」「生活力」「認知・学力」「コミュニケーション・社会性」「人格形成」「余暇」です。

そして、それぞれの項目の中に小項目をおきました。障害、発達の状況に応じて小項目の内容は違いが生じてきます。また、項目毎の内容の量も違います。重度重複障害の場合は、「からだ」に関わる内容が多く、自閉症スペクトラムの場合は、「コミュニケーション・社会性」に関わる内容が多いなどです。

はじめに、それぞれの障害の青年期の特徴的な姿や大切にすべき視点を書き入れました。青年期における障害特性や発達課題、これまでの生育歴から生じる課題などを、はっきりと捉えた上で、どのような力を育てたいかの視点を持つことが大切だと考えました。そして、備考欄に授業との関連を書くことで、今後、この表を、個別の教育支援計画やクラスの教育課程作成、さらには、日々の授業づくりにも役立つものにしていきたいと思っています。

名称を「高等部の時期に大切にしていること・育てたい力」としました。(当日配付資料)

## 5「高等部の時期に大切にしていること・育てたい力」表を教育実践の中に活かすために

高等部の研究テーマにある“豊かな生活”とは、教育の究極の目標である“自立”と結びついているものだと思います。

どんなに障害が重くても、様々な生きづらさを抱えていても、一人の社会人として、それぞれの願いや要求を持ち、社会の中で何らかの役割を果たしながら、主体的に生活していくこと、それが彼らの“自立”ではないでしょうか。その“自立”は、支援を受けながらの自立です。本校では、重度重複生徒の、支援を受けられる力を、「いつでも・どこでも・誰とでも」というこ

とばで表現してきました。家庭や学校以外の場所でも、家族や担任以外の人からでも安定して支援が受けられる力は、生活の幅を広げてくれます。

高等部は学校教育の出口の学部です。希望の進路に向けて、学習や体験を積み重ねることは大事です。しかし、学力や作業能力などの働く力を身につけるだけでは、卒業後の豊かな生活にはつながりません。

一人の社会人として、日常生活を円滑により快適に送ることができるための生活の力が不可欠です。

そして、人間関係やコミュニケーションの力を育てるためには、友達と一緒にやりきって達成感を味わう、今の生活を精一杯楽しむなど、長い人生の中で、学校時代にしかできないことをたっぷりと積み重ねることが大切です。

教育課程の中では、「教科」、「総合」、「教科などを合わせた指導」と同様に、体育祭、文化祭、修学旅行などの「行事」、「自治活動」、「生徒会活動」「チーム」などを大切にしてきました。

基礎学力をつけるために、教材研究を行い、指導内容を改善することはもちろんですが、軽度知的障害クラスの生徒たちの中にも、小、中学校時代の辛い経験などから集団に入れない生徒が増えているため、合同学習の集団を小さくするなどの工夫を行っています。また、安定した学校生活を送るために医療や外部機関と連携が必要な生徒も増えてきています。今後も必要になってくると思われます。

行事では、準備段階から生徒たちが主体的に関われるように、実行委員会形式をとってていねいに取り組んでいます。

自治活動を通して、仲間とともに考え、役割を果たし、人に喜んでもらう経験を積み重ね、自信をつけていく生徒も多くいます。

チームでは、高等部全員を3つのグループに分けて、生徒主体で、様々な障害や発達の生徒たちが一緒に活動します。ペアを決めて1年を通して関わりを深めます。その中で、自分とは違う障害のある仲間がいること、どうしたら、彼らも楽しめるか考える事などを通して、年度当初と年度末ではずいぶん違う姿を見せてくれるようになります。

これまで述べてきた、「高等部の時期に育てたい力」は、高等部の3年間のみで育てられるものではありません。小学部(小学校) 中学部(中学校) 時代につけてきた力の上に積み重ねていくものです。

今後も、12年間のつながりを視野に入れながら、より連携を密にして、ともに学びつつ、教育実践をさらに充実させていきたいと思っています。